



## 日本近代化の恩人シドッチ

新井 宏

宝永五年（一七〇八）八月二十九日早暁、大隅国屋久島の唐ノ浦に、年の頃四十歳、六尺豊かな色白鼻高の異国人が、武士風にさかやきを剃り、羽織袴に二尺四寸余の日本刀を帯びて上陸した。ローマ教皇から派遣されたシチリヤ島パレルモ生れのイタリヤ人ジョバンニ・バッティスタ・シドッチである。

シドッチ……その名を知る人は必ずしも多くない。現在の高校日本史の教科書を見ても、約半数がシドッチの名前さえ載せていない。屋久島の観光案内書にも、またシチリヤ島の観光案内書にも、その名を見ない。明らかにキリスト教の殉教者でありながら、ローマ法王庁から聖人として遇されてもいない。

しかし、シドッチが日本の近代化に与えた影響の大きさにについては、もつともつと注目しても良いであろう。長い鎖国の状態にあった日本が、中国や朝鮮に比べて、より早く近代化を達成できたのはなぜか。

もちろん、専門家による無数の多角的な論考がある。『曰く教育水準の高さ、曰くマニユファクチュア（工場制手工業）の発展、曰く柔軟な政治権力構造、等々である。それに加え、たまたま幕末の頃、欧米諸国がクリミア戦争、セポイの反乱そして南北戦争に追われ、中国では大平天国の乱で忙殺され、日本進出が一時的に停滞した状況も幸いしたのである。』

しかしながら、歴史に遊ぶ世界から飛躍して言えば、それはイタリヤ宣教師シドッチの日本侵入のお陰なのである。シドッチの日本侵入が、新井白石をして、『西洋紀聞』や『采覧異言』を書かせしめ、それが徳川吉宗の「番書の禁の緩和」をもたらし、やがて杉田玄白などの蘭学の隆盛を生み、幕末に至って、大島高任らが独力で高炉を完成する潜在能力をもたらしたのである。

すなわち、日本の近代産業のスタートが、欧米に遅れること、わずかに半周で済んだという幸運は、全くシドッチのお陰なのである。

### シチリヤ島生れの宣教師

さて、そのジョバンニ・バッティスタ・シドッチであるが、彼は一六六八年にシチリヤ島パレルモの貴族の第三子次男として生まれている。輝く海を背景にしたシチリヤ島の活火山エトナの大噴火が起こる前年である。当時のパレルモは、スペインの支配下にあり、対オスマン・トルコの前哨基地として、多くのイエズス会士が訪れ、バロック芸術の花が開いていた。

シドッチは、はじめ郷里の学校で学んでいたが、その非凡な才能はイエズス会士の注目するところとなり、十歳にも満たない歳でローマに出た。そして学に従うこと二十二年、教皇庁の正課十六教科について完全にマスターしたばかりでなく、算術、物理学、数学なども含めて、天文、地理、方術、技芸など、当時のヨーロッパの最高水準の学識を身につけて行つた。そのため枢機卿フェルナリの知遇を得て、若年にして教皇庁の法律顧問に抜擢され、教皇庁第四等の位サチエルドス(司教)に登った。ちょうどその頃、中国やシヤムにおいて、キリスト教の禁教が緩和されるとの情報がローマにもたらされた。多分、日本においても同様の事情にあるだろうとの判断のもと、一七〇〇年には、枢機卿の会議でアジアでの布教の再開方針が決定され、シドッチが日本への宣教師として派遣されることが決まる。シドッチ自らが願ひ出したものだという。

日本への派遣が内定すると、シドッチは直ちに教皇庁にある全ての日本資料を探索し、日本についての膨大な情報を自分のものとして行つた。フランシスコ・ザビエルの報告はもとより、多くのイエズス会士の報告や、天正少年使節団、文倉常長使節団の記録を精読する中で、まだ見ぬ日本への夢が膨らんで行く。マルコ・ポーロの昔からローマ人にとつてあこがれの国であった日本。ザビエルが、異教徒にあつては最もすぐれた国民であると称賛した日本人。シドッチが日本を志向し、日本讚美に向うのは当然の成り行きであつた。

その中でも、特にシドッチが傾倒したのは、シドッチと同じくイタリア出身の宣教師マルセロ・フランシスコ・マストリリであつた。七十年ほど前の寛永十四年(一六三七)単身マカオから日本に密航し、薩摩に上陸して日向の櫛ノ津で捕らえられ、殉教死したことは、教皇庁では、もちろん良く知られていた。シドッチは、マストリリが、クリストワン・フェレイラ(日本名沼野忠庵)の背教の罪をつぐなうため日本で殉教したことに、深い感動を覚え、自らをマストリリに擬し、マストリリの所持していた十字架を下賜してもらつた。マストリリの故智に学び、第二のザビエルを目指すのが、シドッチの目的であつた。

日本行きが内定してから三年後の一七〇三年、教皇クレメント十一世は、インドと中国の典札問題解決のため、

特派使節としてアンチオキアの総司教トウルノンを東洋に派遣することにし、シドッチを日本布教の宣教師兼教皇使節として同行させることにした。

シドッチは、郷里に残した五十四歳になる母を想ったが、バレルモに寄ることなくフランスに出て、フランス・インド会社の船でゼノアを出港した。ちょうどその頃、イスパニヤ王位継承戦争で、イギリスとオランダの軍隊二十万人がジブラルタルを占領するため集結していたが、海峡を無事通過し、インドの東岸ボンヂシェリーに到着したのが、その年の終りの十一月六日であった。しかし、ここでシドッチはトウルノン総司教の仕事を手伝うことになり、結局マニラに到着したのは翌年の九月になつてしまつた。

マニラでは四年の間、日本人国の機会を伺いながら、日本人の子孫や漂流民を尋ね出して日本語の習得に努めている。その傍ら、聖ヨハネ病院や聖クレメント学院を設立し、地域住民からは聖者として崇められたとも伝えられているから、シドッチの人柄や宣教師としての非凡さがうかがえよう。シドッチにとつてもマニラでの成果は大きな自信となつたはずである。そして日本を目指す。

#### 屋久島へ上陸

しかし、日本行きのお機会はなかなか訪れなかつた。もとより鎖国中の日本へ向う船などあるはずがない。やがてその内に、シドッチの決意がフィリピン総督のル

シェベリを動かす。シドッチのために、渡航費一切を負担し、船を一艘蟻装してくれることになつた。船名をセント・トリニダード号といい、ミゲル提督が船長を買つて出て、一七〇八年八月いよいよ日本に向つて船出する。

航海は逆風と悪天候のため六週間以上も要し、屋久島主峰の宮ノ浦岳を遠方から望み見たのは十月九日(宝永五年八月二十七日)である。しかしすぐには島に上陸せずに機会をうかがつた。そして翌十月十日にトリニダード号は島の沖合いで日本の小舟を発見した。通訳の日本人を通して、シドッチの上陸と保護を要請したが、漁師等は厳しい国禁を理由に肯んじなかつた。

シドッチは、いよいよ単独で上陸すべき時が来たのを悟つた。ローマとマニラに宛てた手紙を教通認め、自分をここまで送り届けてくれた乗組員達に感謝するため、黒人や奴隸を含む全員の足に接吻する。人は皆、涙にむせび、口をきける者がなかつたという。そして十月十一日(八月二十九日)早暁、ミゲル船長以下八名に伴われ、小船で陸地に向かう。

シドッチが上陸した地点は、屋久島の最南端、屋之間と平内のはぼ中間にある唐ノ浦である。現在の浦崎の東二百メートルにある。しかし、現地が確認されたのは意外に新しく、松田毅一氏が日欧の記録に基づき現地を精査した昭和四十二年のことである。もとよりシドッチ上

陸の地はおおまかに知られていたが、諸説あったようで、現に市販の屋久島の地図や観光案内図に示されているシドッチ上陸地点も、唐ノ浦とは異なっており、松田氏の考証結果を参照している様子がない。残念ながら、シドッチは日本において、その程度にしか認識されていないのである。

さて、唐ノ浦に上陸したシドッチを最初に見付けたのは、恋泊村の百姓藤兵衛である。武士風にさかやきを刺り、四目結の紋のある浅黄色の紋付き袴に、帯刀姿をしていたとはいえ、言葉が通じない。ローマやマニラで学んだ日本語ではやはり歯がたたなかつたようだ。

恋泊村は、当時人家わずかに四軒の集落で、近隣も小集落ばかりであったが、一週間後には村役人から薩摩藩庁を経て、長崎奉行所宛てに第一報が送られている。それと同時に、シドッチの身柄は、屋久島で最大の港、宮の浦に移される。しかし、薩摩藩の手では言葉の問題があつて、単にローマからやつて来た異国人という程度のことしか分からず、シドッチの語る断片的な言葉を長崎に伝えて見ても、長崎側でもさっぱり要領を得なかつた。結局、宝永五年十一月になつてシドッチは国法に基づき長崎に送られ、オランダ人を介して本格的な取調べを受ける。そこでシドッチは、自分が日本に来たのは、ローマ教皇の命によるものであり布教伝道のためであること、禁教を解いてもらうため江戸に行きたいこと、自分の身

については、本国に送還されるにしろ、日本に留置されるにしろ、また如何ような処分を受けるにしろ、全くかまわないことを申し述べている。そして、その報告が江戸にもたらされたのが、宝永五年の年末であつた。

#### 新井白石の登場

宝永五年が六年（一七〇九）に改まると間もなく、徳川綱吉が没し家宣が六代將軍に就任する。このことが、シドッチにとつても、日本の近代化にとつても、大きく幸いした。家宣の政治顧問ともいふべき新井白石が、シドッチに深い関心を寄せ、自ら取調べを願ひ出たのである。

新井白石……全ての近代の学問が白石に始まるといつても過言ではあるまい。詩人にして儒学者、儒学者にして政治家、政治家にして百科全書派に比せられる博学者であつた白石。江戸時代、熊沢蕃山と並んで多くの儒学者の目標とされた白石は、独学ながら若くして儒学者としての名が高く、初めて木下順庵に師事した三十才の時に、いきなり客員教授並みの待遇を受けた程であつた。しかも生涯にわたつて続けられた漢詩の分野では、江戸期にあつて唯一朝鮮や中国で評価を受けた『白石詩草』『白石余稿』に示されるように、江戸期の代表的な詩人であり、また室鳩巢によれば、若い頃は、俳諧の分野でも桃青（芭蕉）とも競り合つたほどであつたといふ。

政治家としての白石は、家宣の政治顧問を勤めるなかで、長崎貿易制限新令、金銀貨改良などいわゆる正徳の治に大きな功績を残している。またあまり知られていないことであるが、白石が創設に預かった閑院宮家から、後に光格天皇が出ることになり、現皇室に血統をつなぐ基を作ってもある。白石なくして現天皇家の存在はなかったのである。

しかし何にもまして、新井白石は学者であった。博学者であった。『藩翰譜』『読史余論』『史疑』に示された歴史学者としての力量、今なお続く「邪馬台国論争」の巻頭には、未だ白石の学説がかならず紹介されるほどである。地理学者、言語学者、民俗学者、考古学者、宗教学者、植物学者と並べたててもあまり意味をもたないかも知れないが、いずれの分野においても、白石は当時の水準をはるかに抜き去っていた。言語学・音韻学の『東雅』『東音譜』、民俗学の『南島志』『蝦夷志』、「神は人なり」や「石鏡人工説」の『古史通』など、ほとんど全ての分野で日本初の学説を提出したといっても過言ではないのである。

#### 江戸へ

さて、長崎においてシドッチが一貫して主張したのは、教皇の使者として江戸に行き、將軍に拝謁し、禁教の廃止を願うことであった。奉行所の役人が、宣教師の入国は国法により厳禁されていると強圧しても、それはスベ

インヤポルトガルの宣教師の場合であって、イタリヤ人である自分には適用されないはずだというのが、シドッチの主張であった。何時の時代でも、先例のないことを独断で進めないのが役人である。何事も、江戸の宗門改役にお伺いを立てた。

事実、この件は政治的には微妙な問題があり、奉行所の役人達も、シドッチのことをバテレンとはいわず、単に異国人と称していた程であった。

綱吉死後、六代將軍に就任した家宣は、直ちに「生類憐れみ令」を廃止し、間部詮房や白石を起用して政治改革に乗り出していた。当時長崎は貿易収支の赤字に悩み、国際問題には敏感になっていた時期であった。家宣からの諮問もあり、白石も望んで、シドッチの江戸での取り調べが決まる。そしてシドッチが長崎を出たのは、屋久島上陸からほぼ一年後の宝永六年九月二十五日である。江戸への道中は、厳戒の中で、麻縄をかけられた駕籠に、その長身を屈めて乗せられた。そのため、江戸に着いた時には、両足が萎えて全く起つことも出来なかった。

#### 東西の知性の出会い

江戸では、小石川茗荷谷の山屋敷、通称切支丹屋敷に収容され、十月二十二日から宗門改役(切支丹奉行)の横田備中守(大目付)と柳沢八郎右衛門(作事奉行)の立会いのもとに、訊問が開始された。折りから、今にも雪が降出しそうな寒い日であった。薩摩藩の支給した

南国の着物をまとったシドッチに対して、奉行が暖かい着物を与えようとしたが、シドッチは異教徒の施しは受けないと断り、それよりも逃げるはずのない自分のため、夜も付添う看守に気の毒なので、獄中に繋ぎ止めてほしいと申し入れた。このようなやり取りには、同席者一同、心打たれる思いであった。

ここで白石の本領が発揮される。「そなたは思うにも似ずうそつきだ」と高飛車に決めつけたのである。聖職者をうそつきと決めつけたのであるから、シドッチも大いに気色ばんで、物心ついてから、うそ偽りを申ししたこととはないと反論した。それに対して白石は、看守をつけるのも暖かい着物を与えるのも、ともに貴殿を守るためのものである。暖かい着物を、法の建前で受けられないなら、異教徒の看守のことなど知らぬ顔をすべきであるのに、とやかくいうのは、いづれか一方がうそに違いないと、論理的に責めたのである。矛盾をせめて、相手を承服させるのは、白石の得意とするところであったが、その中に宿る白石の温かさには、シドッチも感し入った。かくしてここに、東洋と西洋の代表的な知性が対面する奇跡が始まったのである。

白石は、この日に備えて、転びバテレン岡本三右衛門（シチリヤ生れ本名ジョセフ・キアフ）の著書をはじめ、切支丹と海外に関連する和漢籍にはほとんど全て目を通していた。訊問にはオランダ通詞の今村英生も同席した

が、予備知識の豊富な白石にとっては、ラテン語まじりの日本語でも結構意は通じたらしい。初日は西洋諸国の地理や歴史がテーマであったが、白石の持参したマテオ・リッチの万国坤輿図が時代遅れのもので、十分な成果は得られなかった。

第二回の訊問は、三日後の二十五日に行われた。こんどは白石はオランダ人が献上したヨアン・ブラウの東西両半球図を持参した。シドッチは、この地図はイタリヤでも貴重なものだとして評価し、これを基にして、ヨーロッパの地理・歴史や政治形態のことが、直接詳細に白石に伝えられた。

続いて三十日に行われた第三回の訊問は、切支丹奉行の出席もなく、よりのびのびした雰囲気のもとで行われたが、内容的には前回を引き継ぐものであった。シドッチの天文学から自然科学、地理、歴史に至るまでの博覧強記ぶりには、同じ趣向のある白石をいたく感心させた。これを基にして書かれたのが我が国初の体系的な世界地理書『采覧異言』である。

そして最終回に当る第四回の公式訊問が行われたのは、十二月四日であった。いよいよ核心の宗教問題が取り上げられる。シドッチは、最初の訊問の時から、江戸に来た目的すなわち禁教の解除を求めて、キリスト教についてしきりに語りたかったが、白石はそれまでわざとその機会を設けていなかった。その頃になると白石は、シド

ツチの博識や知性のみならず、慎み深く謙虚な物腰からにじみ出る人間性、それにも増して、親兄弟とも別れて、自分の利害を眼中に置かず、艱難辛苦のすえにひとり日本にたどり着いた献身的な態度にすっかり魅せられていた。シドツチもまた、合理主義者の裏に潜む白石の人間性に感応して、この人物であれば、禁教解除の機会をもたらしてくれるかも知れないと、期待を高めていた。

#### 切支丹アレルギーの緩和

待ち望んでいた時が来て、シドツチは乏しい日本語の中にあっても最大限の熱弁をふるった。我ら宣教師が日本にやって来るのはけっして領土侵略のためではないこと、その点ではむしろ新興国オランダやイギリスなどプロテスタントの国の方が、激しくアジアに侵入しており、はるかに警戒を要することをシドツチは具体的に説いた。それはオランダなど一介の商人国に過ぎないと見なしていた当時の幕府の認識を大きく変えるきっかけとなったばかりでなく、一方では切支丹への警戒心を緩和させるのに大きな効果があった。

切支丹の教義については、イエス・キリストの誕生から死、そして再生にいたるまでのキリスト教の歴史を説き、キリストは人間の罪を償うためこの世に遣わされたのだと説いた。その説明は、岡本三右衛門(キアラ)の記すところに逐一符合していたという。かくして、領土侵略の意図がないということについては、ある程度誤解

を解くのに成功したが、キリスト教の教義については、儒教式の合理的な考え方になじんだ白石にとつて、あまりにもドグマに満ちていて、到底理解し得るところではなかった。そのため、白石は西洋の知恵は、形而下には勝れるが、形而上なるものはあずかり聞かずと判断してしまう。後の和魂洋才の始まりである。

そして、いよいよシドツチの身の振り方に係わる訊問が始まった。焦点は、シドツチが布教のためにやってきたのか、あるいは宣教の許可を求める信使としてやってきたのかにあった。シドツチの気持ちからすれば、どちらでも同じようなものであるが、判決を下す側からすれば、大きな違いである。シドツチはたしかにローマ教皇から派遣された使者だと主張してはいるが、国書を持参した訳ではない。白石の気持ちからすれば、なんとか信使としての線でもとめたかったが、証拠は不十分であり、しかも困ったことに、本人は布教への意欲をしきりに見せている。

結局、白石はシドツチの処分案として、上策を本国送還、中策を拘禁、下策を処刑として上申した。結果として、幕閣および家宣が採用したのは、切支丹屋敷に終身囚禁するという中策であった。ただし、囚禁の条件はけっして悪くない。年二十五両の他、五人扶持が給付され、日常の世話をするための召使いの夫婦も付けられた。このような状況は、オランダ人経由でマニラにも伝わった。

シドッチが江戸で厚遇されているばかりでなく、シドッチの毅然とした態度が將軍を動かさし、いずれ鎖国政策も緩和されるといふ噂まで生まれ、それが正式な報告書にも載せられて、一七二三年にはローマにまで届く。その結果、シドッチは在日教皇代理教区長に任命される。

実際、シドッチの囚禁はゆるやかなもので、その後も白石はしばしばこの切支丹屋敷を訪れている。しかし、当然のことながら外部との接触は一切禁じられており、生活は保証されているとはいえ、道を信すること篤きシドッチにとっては、耐え難い生活であった。かつてこの切支丹屋敷に住んだ転びバテレンのフェレイラ（沢野忠庵）やキアラ（岡野三右衛門）のことを想い、その心の動きを自分の心に重ねてみても安らぎは得られなかった。一方、ちょうどその頃、白石は長崎における金銀等の流出問題に取り組んでいた。日本では江戸時代の前半まで有数の金銀の産出に恵まれ、輸入代金の支払いには、主として銀そして金が当てられ、膨大な量の金銀が海外に流出していた。ところが元禄を過ぎた宝永の頃になると、銀や金の産出が、かつての十分の一以下の水準まで低下してしまっていた。代わりに銅が最大の輸出品として登場したが、それも元禄を過ぎる頃からかけりを見せはじめ、一方では贅沢品の輸入はますます増大し、金銀の不足は貿易制限でもしななければ、どうにもならない状況に至っていた。

白石はこの金銀流出問題を契機に、シドッチに対する疑念を生じる。すなわち、シドッチが既に元禄改鑄の金貨の品位低下を通じて、日本における金銀欠乏を知っており、金銀の威力を利用して布教をしようといふそぶりを示していたからである。シドッチが信仰に支えられた無私の人であったことは疑いないとしても、当時の宣教師が経済を知らない訳がない。いやむしろ布教に当たって、経済を武器とするのは当然のことであった。このような疑念もあって、白石は海船互市新令、通称長崎貿易制限令を立案する。それと共に、切支丹屋敷通いからも段々に遠のく。

#### 召使い夫婦の洗礼

このような中で、シドッチは持てる全てのエネルギーを持って、自分の本来の目的である布教に向かう。とはいっても、唯一の対象者は、召使いの夫婦、長助と阿春である。もちろんこの夫婦は、切支丹屋敷に勤務するだけに事情があった。もともとは転びバテレン岡本三右衛門の召使いであったが、岡本の死後も切支丹屋敷に留め置かれた者である。

さて岡本三右衛門とはどんな人物であったのであろうか。本名をジョセフ・キアラといい、一六〇二年シチリヤ生まれで、日本教管区長フェレイラ（沢野忠庵）の棄教の不名誉を雪辱するため、一六四三年筑前に潜入した十名の宣教師の一員である。それはシドッチの敬愛す



るマストリリが同じ目的で入国殉教してから六年後のことであつたが、結局は逆さ穴吊りの拷問に耐え切れず棄教、キリシタン屋敷で四十二年間生活し幕府の切支丹禁制政策に協力し、シドッチ収監の二十五年前に亡くなつてゐる。遠藤周作の代表作『沈黙』は、キアラをモデルとして、自分が転ばぬ限り信者が拷問を受け続けて死んで行くなかで、いくら折つても沈黙を続ける神への絶望と、それにもかかわらず神への信頼を寄せる心情を描いている。

シドッチはおそらく同じシチリヤ島出身のキアラについて良く知つていたであらう。長助と阿春もキアラからひそかにキリスト教を学びシチリヤの美しい風土について聞いていたに違いない。シドッチに仕えるようになる頃、夫婦は共に五十歳を越えていたが、シドッチの人間性に触れてそこに神を見る。

そして長助と阿春は洗礼を受ける。そればかりでなく、洗礼を受けたことをわざわざ奉行のもとに自首し、火刑でも磔刑でもどんな極刑に処せられても良いと申し出た。それはシドッチが切支丹屋敷に囚禁されてから五年後の正暦四年のことであつた。五十年代半ばの夫婦が、このような決意に至つたのは何であつたらうか。シドッチの博愛に感激し、シドッチの唯一の希望に自分達の身を献じることで応えたのではなからうか。そのためには、ひそかに洗礼を受けるだけでは不十分で、それを公表する必

要があつた。あるいはそれがシドッチの望みでもあつたかも知れない。

牢に閉じ込められた長助は十月七日に病死、同年十月二十一日夜にはシドッチも死亡する。絶食死、病死、凍死、憤死、餓死などの説がある。

白石はその知らせに当惑する。信使として助けたのは、シドッチとの無言の約束であつたはずではなかつたか。その好意を無視された無念さ、しかしそれにもまして、シドッチの勇氣ある行為に思いが揺れた。そして、シドッチの死を機に『西洋紀聞』の執筆を開始したのである。この『西洋紀聞』は、漢文体で書かれた世界地理歴史書の『采覧異言』を補完する形で、国文で書かれており、天主教の紹介やその批判に重点が置かれている。

#### 蕃書の禁の緩和

鎖国の江戸時代にあつて、この両書ほど政治家や知識人に国際的な意識を開眼させた書物はなかつたであらう。なによりも大きかつたのが、享保五年(一七二〇)に吉宗が「蕃書の禁の緩和」をしたことである。家宣、家継に代つて政権に就いた吉宗にとって、政治力学的には白石を排斥するのが当然の成り行きであつたが、意外にも政策面では白石の施策を多く継承している。特に長崎貿易制限令や金貨改鑄政策は、吉宗に至つて定着を見たほどである。その流れにあつて、吉宗は禁書緩和の政策をとり、実用的な蘭学を奨励したのである。

蘭学の興隆ほど鎖国日本を利したことはなかった。元禄の文化爛熟を経て、日本人の好奇心は島国内には留まり得なかった状況のなかで、蘭学が開花する。その頃ちようど、ヨーロッパでは近代化そして産業革命への足音が急速に高まっていた。時代は動き始めていた。

そのような状況にあつて、中国はもちろん朝鮮も長い間中華文明の絶対的な優越意識に支配され続けていた。吉宗が禁書緩和を決めた一七二〇年には、中国では逆に清の康熙帝がキリスト教禁令を出す。それに対して日本では、鎖国下でありながら、西洋に眼を開き、医学、天文学、自然科学などを中心にして蘭学者と呼ばれる者が百名以上も輩出するようになる。ドイツのアダム・クルムス教授の近代解剖学の名著がアムステルダムでオランダ語に翻訳されたのが一七三二年であるが、それが輸入され、オランダ語をほとんど解さぬ杉田玄白らによって『解体新書』として出版されたのが一七七四年である。近代鑄砲の技術書ヒュゲーニンの『ロイク国立鑄砲所における鑄造法』が出版されたのが一八二六年であるが、十一年後には早くも日本に入っており、この本だけを基にして、多くの反射炉や洋式高炉が日本各地に建設されたのが一八五〇年代である。また化学に関する最新知識が宇田川榕庵により『舎蜜開宗』として一八三七年に紹介され、一八〇七年に発明された雷管についても、尾張藩の医師吉雄常三が国産に成功したのが一八四三年であ

る。

かくしてペリー提督がやって来た一八五三年頃には、緒方洪庵の適塾に学ぶ者が三千人にもおよび、オランダ語を自由に使える蘭学者が数百名に達していたという。

#### 半周遅れで走れた明治維新

ヨーロッパは産業革命を経て激しい勢いで走り始めていた。しかし蘭学のお陰で時差は数十年、いわば半周遅れであった。大差ではあったが、中国や朝鮮のように一周遅れにはなっていないかった。その頃、朝鮮では知識階級で西洋語を理解するものなど皆無であったことや、阿片戦争が起つた時に、清の道光帝をはじめとする多くの官吏がイギリスがどこにあるのかさえはつきり知らなかったことを思うと、如何に蘭学の隆盛が日本を救ったかわかる。明治維新の直後、政府高官がこぞつて、混乱収まらぬ日本を後にして米國やヨーロッパに向かったのも、その流れの中にあつてこそ理解できよう。

日本における近代化の成功は、歴史的に見れば僅差の幸運によつてゐる。もし蘭学の興隆がなければ、朝鮮や中国と同じ道を歩んだ可能性が高い。吉宗をして「蕃書の禁を緩和」させた蘭学の祖新井白石。そして新井白石をして『采覧異言』や『西洋紀聞』を書かせしめたジョバンニ・パッティスタ・シドッチ。大袈裟にいえば、シドッチと白石が明治維新以降の躍進を生み、日本の現在を築いたのである。